

タイトル：2024年度 教育セミナー（第20回）

日時：2024年9月19日（木）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階 大会議室（303）

「1869年「オスマン国籍に関する法令」の外交史的位置づけ—オスマン・ギリシア危機(1868-69)と「東方問題」を背景として—

上島怜也（明治大学大学院）

セミナーを終えて4日ぶりに帰宅し、あまりに疲れていたためかすぐに寝てしまいました。数日間朝から晩まで常に緊張感を保ちつつ研究に向き合うという機会は未だかつてなく、振り返れば非常にハードでありながらも充実した4日間でした。

今年度の中東☆イスラーム教育セミナーにて、私は3日目に発表の機会をいただきました。準備段階では、自分の研究について初めて聞く方々に向けた発表であるということ常を常に念頭に置いて、研究対象の基本的な情報、先行研究での議論とそれをうけての自分のオリジナルな問題関心、そして自分の主張とその根拠となる史料の記述を、できる限り簡潔かつ丁寧に、わかりやすくまとめることを意識しました。その結果、発表後には多くの受講生や先生方からの射た質問・有益なコメントを頂くことができ、また休憩時間にも数名から「面白かった」と声をかけていただけました。今後修士論文を執筆していくにあたって確かな自信と手応えを得ることができたため、発表に挑戦して本当に良かったと感じています。

また、他の受講生・先生方のご発表からも、多くの新しいことを勉強させていただきました。中国史・イスラーム史を主に扱う専攻に所属している私にとって、普段馴染みのないイベリア半島等の地域を対象とした研究や、政治学や人類学といった多様なディシプリンに立脚した研究は非常に新鮮でした。また、今年度のセミナーでは現地調査を行っている受講生が非常に多く、現地トークで盛り上がりと同時に大変刺激を受けました。できる限り積極的に質問することを心がけましたが、不勉強がたたったためか先行研究や史料に関してといったメタ的な質問ばかりになってしまったような気がしています。もっと内容に踏み込んだ質問をするためにも、今後は視野を広げてさまざまな地域や分野に触れ、広範な知識を身につける必要性を痛感しました。

個人的な反省点としては、事前に名刺を作成して持参するべきであったと思っております。自分の名刺の用意が無く、数名から名刺を一方向的に頂く形になってしまったためです。早めに顔と名前を覚えてもらうためにも、一工夫必要であったなと反省しております。

総じて本セミナーは、発表を通じて自分の研究に改めて深く向き合うとともに、普段の研究生活ではなかなか関わることのない他大学の院生や先生方との交流を通じて

様々な知識に触れることができる、大変有意義な機会でした。企画・運営にご尽力いただいた AA 研の皆さまに心から感謝申し上げます。